一般質問

町長の町政運営姿勢を問う

南雲　正

地域懇談会の目的と成果は

質問

「人の話をよく聞きます」「よく考えます」「明解な説明をします」ということで地域懇談会が開催されたが、参加した町民からは、町長との膝詰め談義や直接意見を交わす場面がなく、町の将来に係る問題には町長が意見を述べるべきだ等、厳しい批判があったようである。

町長が示したまちづくりの方向についても不明朗な課題の提供等もあり参加町民の間にも戸惑いが生じているようである、この地域懇談会実施の目的と成果についての評価を伺いたい。

町長答弁

町長の対応が思わしくなかったという新潟日報の記事が出ているが、町長が答えるべきところを町長が答えず課長に振った部分がある。今後、このことを反省して明解な話をするような機会をつくりたい。

参加者は少なかったが直接町民の皆様から話を聞く機会ができ、防災対策、観光振興、道路整備等を来年度予算に加味したい。私は口に出すことで、自分にプレッシャーをかけてやっていく方であり、口に出したものはやって行きたい。

町長の目指す「一流の田舎町」とは

質問

町長は「二流の都会づくりをやめて、一流の田舎町を目指す」ということを、今後のまちづくりの方向として示しているが、今まで湯沢町は二流の都会づくりを目指してきたのか、一流の田舎町の方向が全く見えてこない。地域懇談会でモデルは福島県三春町だといっていたが、町の規模、財政状況、就業構造、まちづくりの方向が全く違う三春町のどこがモデルとなるのか。町政立て直し三年断行を町民と約束している町長は、来年度予算に、この一流の田舎町づくりを反映させなければならないと思うが、町長の目指す「一流の田舎町」の概要を示してほしい。

町長答弁

過去を否定するという気持ちはないが、不適切であれば今後こういう言葉は使わない。

一流の田舎町とは町民憲章の美しい文言と総合計画の施策の方向性を見て、バブル期に東京都湯沢町と揶揄された町ではなく田舎の原風景の中に遊ぶ子供達の笑顔を思い描くキャッチフレーズであり、新しく別の町を作るとか、今までの方針を変更するものではない。

三春町は国の制度を活用し、すばらしい街並み景観を作っている、外から来た人が評価し、見習うところがたくさんあり、私のモデルという考えである。

質問

湯沢町を立て直すということは、この町に住んでいる人たちが、この町で飯を食える町にしなければならない。キャッチフレーズだけでは絵に描いた餅であり、20年度予算に反映させ町政建立て直し三年断行の約束を果たすには具体的取組が必要である。

三春町の景観整備は30年かかっている、まちづくりの指針には町長の言う「一流の田舎町」というような方針は全く無い、むしろ参考にしてほしいのは地域ごとの町づくり協会による自主的な町づくり手法である。

町長答弁

この構想を具体化するために環境では自然保護条例の制定、バイオマスタウン構想の実現、観光では農業との連携による地消地産、二地域居住、湯沢駅の活性化、医療では湯沢病院の利用料金制、電子カルテ導入、教育では湯沢中学校の建て替えとこれからの子供達の教育について教育委員会に諮問している。三春町については書いた人の本を読んでいる。

中高一貫教育校の湯沢進出は

質問

湯沢高校跡地は、将来の湯沢町の教育エリアとしての重要な地域である。県内の学校法人がこの地域に中高一貫教育校の進出を考えていると聞くが、今後の湯沢の教育をどういう方向に導くかを検討することが先であり、中高一貫校等の誘致は、その後の問題である。首都圏では少子化時代の生き残りをかけて290校の中高一貫教育校があり実績のない学校の進出は難しい。この厳しい状況の中での中高一貫校の誘致についての町長の見解を伺う。

町長答弁

中高一貫校誘致については、企業誘致的な考えからすると、よい話と思っているが相手方に経済的な力と社会的な信用力があり、条件が具備されていれば誘致を考えたい。湯沢中学校の改築問題とは切り離して考えている。

湯沢のこれからの教育、中学校の改築、高校跡地の活用等の問題は教育委員会で立ち上げた検討委員会で充分検討してもらいたい。